

未来へ 平和をつなぐために

終戦75周年特集

図総務課総務係 (☎5722-9205、☎5722-9409)

平和について今一度考えませんか

平和のための写真展

戦争の記憶を次世代に伝え、平和について考えるきっかけとなるよう、毎年8月に広島・長崎での被爆や東京大空襲などの写真を展示しています。展示写真の中から、広島の写真を紹介し、写真は、戦争の悲惨さ、命や平和の大切さを私たちに問いかけます。

日時 8/1(土)~16(日) 8:30~17:00
会場 総合庁舎本館 1階西口ロビー

広島県商工経済会の屋上から見た広島県産業奨励館(原爆ドーム)と爆心地付近

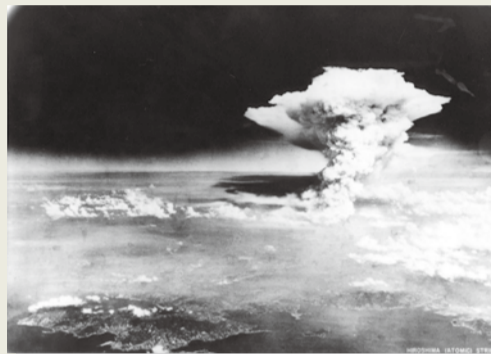


建物は一瞬にして大破し、天井から火を噴いて全焼した。爆風がほとんど真上から到達したため、壁の一部は倒壊を免れ、ドームの鉄枠とともに象徴的な姿をさらした。(爆心地からの距離260m)
撮影/米軍

目黒区平和都市宣言

かつて人びとは、戦火に包まれ悲しい歴史の一ページをつくった。時は移り、今、平和の尊さをしみじみと思う。青い空、緑の木々。街には明るいあいさつがかわされ、人びとの顔にほほえみが浮かぶ。この幸せを再び失ってはならない。わたくしたちは、地球のすべての人びととともに永遠の平和を築くよう努力する。この誓いをこめて、目黒区は平和憲法を擁護し、核兵器のない平和都市であることを宣言する。

昭和60年5月3日 目黒区



きのご雲

米軍機より撮影した巨大なきのご雲、昭和20年8月6日。人類史上最初の原子爆弾が広島市に投下された。約80km離れた瀬戸内海上空からの撮影。(投下から約1時間後に撮影)
撮影/米軍



8時15分で止まった時計

二川謙吾さん(当時59歳)は、市の中心部へ建物疎開作業に向かう途中、被爆。右肩から背中、頭部に大やけどを負い8月22日に死亡。この時計は、息子から贈られたもので、肌身離さず持ち歩いていた。(爆心地からの距離1,600m)
寄贈/二川一夫氏

提供・所蔵/広島平和記念資料館

小・中学生広島派遣

平和の特派員 体験レポート

区は、次代の平和を築き担う子どもたちを「平和の特派員」として、毎年、広島に派遣しています(今年度は感染症対策のため、派遣事業を中止しました)。

昨年も24人の小・中学生が広島へ行きました。平和記念式典への参列や被爆されたかたとの対話などを体験し、広島で平和について考え、感じたことをレポートにしています。その一部を抜粋して紹介します。(学校名・学年は派遣当時)



平和の特派員代表あいさつ

大鳥中学校3年 園田直輝さん

僕は、小さい頃から祖父母のいる新潟へ帰省します。

祖母は74歳、つまり戦争が終わったと同時にこの世に生をうけました。もし、原爆投下候補地の新潟に原爆が落とされたら、祖母は生きていなかったかもしれないし、母や僕も存在していなかったかもしれません。しかし、広島に原爆が投下されたことにより多くの人が亡くなり、祖母や母、僕のようにその日に生まれた人、未来に存在したかもしれない人などの命も奪われたことを思うと僕は心が痛みます。

未だに世界では、内戦や核開発が続いている国がいくつもあります。原爆の恐ろしさが知られていないから、このようなことが起きているのではないのでしょうか。

今回、広島派遣員として参加することで、実際に見て、聴いて、感じることで僕は平和について何が出来るかを学んできたと思います。

●大鳥中学校3年 伊藤蘭乃さん

私は戦争を経験したことはない。しかし、絶対にしてはいけない恐ろしい事だということは分かる。広島に行く前は、「海外の人は広島の前爆を知らないだろう」と思っていたし、「どうせ何も考えていないだろう」と考えていた。

しかし2日目の平和記念式典に参列して驚いた。多くの外国のかたが式典に参列していたのだ。もしかしたら、日本人よりもいるのではないかと思うくらいだった。式典に参列した後、公園内のかたがたにインタビューをさせていただいた。「平和とはどんなことか」という質問をある1組の外国人にしてみると、またまた驚くべきことがあった。2人で話し合い、真剣に答えてくれたのだ。ほかの外国人のかたは、「皆が笑顔でいることが平和なんじゃないのかな」と答えてくれた。この時私は「外国の人は何も考えていないだろう」と考えていた自分が恥ずかしくなった。

平和な時代に生まれてきた私たちは、平和や戦争について特に深く考えたことはなかったと思う。これからもずっと日本が平和でいるためには、お互いに相手を思いやればよいと思う。私もこれからは人にやさしく接しようと思うことができた。

●菅刈小学校6年 埴由さん

この3日間、特に印象に残ったのは被爆されたかたと懇談したことです。

戦争のことをあまり知らなかった僕は、少し胸が苦しくなりました。原子爆弾のことや、広島市のこと、自分の家族のことや、何年、何十年たっても残る後遺症のことなど、戦争によって起こったさまざまなことを教えてもらいました。非戦闘員である一般市民を攻撃して死に至らせたこと、多くの市民を殺傷するために、上空で爆発させたこと、数多くの非人道的行為を行わせた「戦争」が恐ろしいと感じ、おかしいということをおかしいと思えない人たちが怖いと思いました。相手の家族や、自分の家族、仲間の家族を想像したら自然と争いが止むはずなのに止まなかったことで、戦争を二度としてはいけないと、改めて考えそのことについて多くの人に発信していきたいと思いました。年々被爆されたかたが亡くなっていく中で、被爆されたかたと懇談できたことを大切に思い「自分が伝える」という使命感がわきました。

「令和元年度小・中学生の広島派遣体験レポート集」は、総合庁舎本館1階西口ロビー(8/1~16)・4階総務課で配布します

